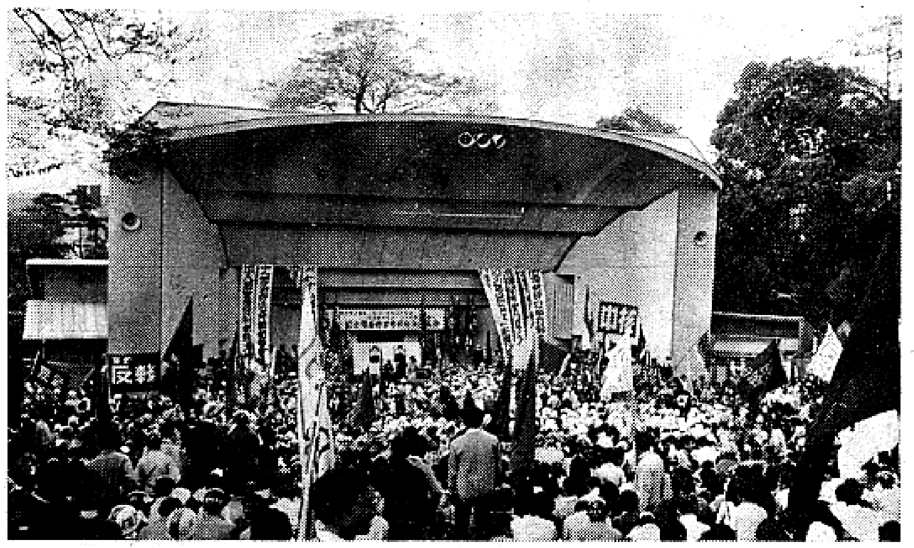
記事紹介

二面
カマと竹ヤリの闘魂＝三里塚の闘い
三面
再び門前抗議集会＝三菱電機「前原君を守る会」
官僚化との闘い＝三池労組
四面
アル・ファタ（パレスチナ革命的解放戦線）の闘い

新左翼

1969年
10月15日
第41号
月3回5、15、25日発行
1部 15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円〒共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2－10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可



戦闘的な労働者、学生、市民でうめつくされた十月十日の京都円山公園音楽堂

中央集会に10万

10・10 新左翼統一行動が前進

羽田闘争二周年記念、10・21スト貫徹、佐藤訪米阻止、11月安保決戦勝利をめざして、あらゆる戦闘的労働者・学生・市民を総決集した「10・10全国統一行動」は十日午後、東京・京都・仙台・札幌・名古屋・福岡など全国各地で展開された。佐藤政府はこの闘争を敗北させるために、事前に大学のバリケードを破壊し、強制捜査をおこない、多数の青年労働者・学生などを検挙したほか、不法な所持品検査を強制し、マスコミを使ってデマを流し闘争に対する「恐怖心」を煽ったが、6・15をこえる参加者を勝ちとり、戦闘的労働者・学生・市民の戦列が、この間の激しい闘争のなかで鍛えられ成長していることを示した。十月二十一日の国際反戦デーと十一月十七日の佐藤訪米阻止闘争にむけてこの闘争は巨大な大衆的爆発を闘いとるための貴重なステップとなった。この統一行動のために作られた各地の実行委員会は、革マル派をふくめて、新左翼のすべての諸党派が参加し、内部に激しい党派間闘争をふくみながらも、新左翼諸勢力の行動の統一が実現したが、今後の闘争にとってこの統一が発展するかどうかが、成否の重要な鍵となろう。

京都市の円山音楽堂では午後一時から「全関西労学市民総決起集会」がひらかれ、演壇から通路まで、立すいの余地なく、色とりどりの旗とヘルメット、人の波でうづめつくされた。集会とデモに参加した労働者、学生、市民は一万人に達した。井上（京都反戦）、松尾（京大全共闘）、柳原（全大阪反戦）の各氏が議長席についた後、挨拶に先立ってこの間の闘争で犠牲となった山崎、津本、望月の三君に対して、全員が黙とうした。その後、山崎博昭君の兄、建夫氏が挨拶をのべ、関大全共闘が津本君の兄のメッセージを代読した。

この集会で発言した団体の名前は次のとおり。日中造反全共闘、統一救対、中核派全学連、同大全共闘、学生解放戦線、安保粉砕全国学生共闘会議、国際主義共産学生同盟、関西フロント、社学同全国委員会、全関西反帝学評、京都べ平連、関西地区反戦連絡会議、大阪東南地区反戦、東大阪地区反戦京都南部反戦、全泉州反戦、大阪中電ストライキ実行委、京都市役所反戦、電機社研、枚方警備労組任錫金を支持する会。

最後に任錫金氏があらわれ朝鮮と日本両国人民の革命的連帯を力づよく訴え満場の拍手をあびた。

全員でスローガンを確認した後インターナショナルをうたいデモ行進に出発した。

機動隊の並進規制をうけながら河原町通を元気一杯にデモ行進し京都市役所前で解散した。

この集会に対して警察は円山公園に通ずる各所で通行人を検問し女子のカバンからハンドバックをあけさせ、拒否するものを身柄を拘束して脅迫しさらに解散地点の京都市役前に五千人の機動隊を配置し、デモ隊以外の人たちの出入を禁止し、一般通行人をしめだすなどの不当な弾圧をおこなった。

東京でも明治公園で三時すぎからひらかれた中央集会には、十万人の労働者、学生、市民が参加した。この集会には、総評をはじめ傘下の各組合が不参加の方針をだしたにもかかわらず、各単産、単組の青年部が参加したのをはじめ反戦青年委員会などの青年労働者の参加が大きくふえていた。会場から日比谷までデモ行進し散会した。（関連記事三面）

四国決起集会に一千名結集

十日 松山市愛大で

十日愛媛県松山市の愛媛大学で「全四国労学決起集会」が、四国全共闘連合の主催でおこなわれた。この集会には四国各県から無期限バリスト中の愛大をはじめ、徳島、高知、香川、高知女子、松山商の各大学全共闘、全闘委をはじめ、新居浜ベ平連などの労働者学生、市民約一千人が参加し、10・21と佐藤訪米阻止にむけて、全力をあげて闘うぞ」と誓いあった。

集会後、警察機動隊の弾圧に対して、果敢なデモを展開し、多数の市民がこのデモと一緒に行進した。

視点

新たな前進の条件

転換点に立つ学生運動

（一）

大学ではいまや次々にバリケードが破られ、機動隊常駐下での授業再開がつづいている。一昨年の一〇・八以降、日大・東大闘争を闘いぬき、全国の学園に闘争の嵐をまきおこしていった全学連・全共闘は、大学臨時措置法成立以降、大学当局の自民党政府への屈服により機動隊との対決のなかで敗北を余儀なくされ、街頭政治闘争へ急速に傾斜している。「なぜ早く機動隊を入れて全共闘を弾圧しないのか」と、大学当局の弱腰を非難してきた日共＝民青は、右翼秩序派と手をくんで、大学当局から改革案を提案させ、それを手直して、基本的に中教審答申となんらことなるところのない「改革」と旧秩序復活をいそいでいる。

いままで学生運動の最左翼にあって闘争の指導権を握ってきた全学連・全共闘の指導権が、全体的に弱まり、政府の厳しい弾圧のなかで運動の停滞が進行しつつあるとき、これに抵抗して、あたらしい最左翼部隊の形成が、各種の形をとって進行しつつある。

学生運動はたしかにいま重大な転換点に立っている。大衆運動には波があり、昇り坂と下り坂とあることをさけることはできない。下り坂だからといって決して敗北ではない。この停滞を敗北というのは極めて短い期間に限られた見方であり、学生運動の少数の部分の動向に限定された見方にすぎない。近い将来必然的にむかえるにちがいない高揚、その高揚をさらに高度の質をもった高揚にするための、戦線の整備と準備の時期がいま始まっているのである。

現在まだ闘争を継続している部隊は、この学生運動の転換点にあって、敵権力の追撃と闘いながらこの時点で必然的におこる味方の陣営の混乱、志気の沮喪による損害を最少限に防止し、整然と転換させる役割をになっている。けっしていちかばちかの絶望的な行動におちいったり、敵にうしろをみせ敗走してにげたりしてはならない。長期のみとおしに立って、戦線の整備をはかる時期である。

この二年間の学生運動の高揚が日本の階級闘争に及ぼした影響は極めて深刻であった。学生運動が及ぼした影響の深さと広さは、いまだかつてなかったといって過言ではない。それ故学生戦線の整備が日本の階級闘争の全局面、なかんずく労働運動に及ぼす影響は大きい。

反戦青年委員会が重責を首尾よくにない、日本の労働者階級の先頭部隊としての役割をはたすことができるかどうかは、この間の大学闘争を労働者階級の階級的利益からどのように評価し、どのような政治的教訓をくみとるかにかかっている。

（二）

われわれはかつて本紙二月五日号の「視点」で、大学は日本帝国主義体制の連鎖のなかで「最もよわい環」であると書いた。これは二つの意味をもっていた。ひとつは、大学のもつ旧くさいカビのはえた封建的な徒弟制度は、高度に発達した生産力を持つ独占資本家階級が、大学を利用するうえですでに障害となっており、早晩「改革」がさけられなかったこと。もうひとつは、大学がもっていた学問の自由と学園の自治の内実がまったく腐敗し、支配体制のかざり物にしかすぎず、学園の自治から疎外されている無権利な状態を自覚した学生が、これに対して根底的な批判をもって立上るや、彼らを弾圧するために、支配階級にとってこの貧弱な飾り物が邪魔になったこと。学生の非難の的となった「学園の自治」の上にあぐらをかいた教授会の特権をとりあげることは、支配階級にとっても時間の問題だった。

いまや「聖域」であったはずの学園は、機動隊の泥靴でふみつけにされ、学生は身分証明書を提示するか、あるいは誓約書までかかされるという屈辱をうけている。昨日までは全共闘のデモの前に頭を下げ、あるいは大学に顔をだすことのできなかった高級職員や教授たちは、いまや大学内をふんぞりかえってかっぽしている。

「大学の自治」はこの間の激しい闘争のなかで、ボロボロに破られ、あとかたもなく消えうせた。大学は、支配階級との赤裸々な対決の場となった。「学園の自治」は「大学だけが治外法権であっていいのか」との口実によって、簡単に破棄されたのだ。

すでに二十年もまえに工場、鉱山などの現場では、労働者から自由と民主主義はすっかり取上げられている。憲法、労働法、労基法の美辞麗句はどこにあるというのか。すでにあらゆる職場では、初歩的な日常要求の闘争さえ、これを目的意識性をもった持続性のある闘争にしようとするかぎり、非公然の闘争組織なしに、勝利できない状態にある。労働組合運動も体制の枠内で許されるのは執行部＝労働官僚の運動、すなわち組合員大衆不在の極めて議会主義的運動が精一杯ではないか。

日本の階級闘争のなかで圧倒的比重をしめる労働者階級が、民主主義と自由をはぎとられ、支配階級との赤裸々な対決をしいられているとき、支配階級があえて「聖域」を犯し、飾り物をはぎとったのは当然だった。支配階級は学生に対するどんなわずかな譲歩であっても、彼らに対する譲歩が労働者階級を始めとする被抑圧人民諸階層に対する励ましとなる故に、特権的教授会が専有していた「学園の自由」さえ恐れなければならなかった。

七〇年安保と沖縄問題の処理に苦慮する支配階級がもつこの弱点をみぬき、フランスで学生運動が弾圧されるや直ちに労働者階級が自己の要求をひっさげて資本家と対決し、工場占拠によって学園闘争との連帯を図ったように、わが国の労働者階級が立上れなかったのは、フランス資本主義体制のもつ構造的弱さと同時に、わが国の労働者階級の政治的自覚の低さを示すものである。

これを単に既成左翼の裏ぎりの結果だけに帰するのはあまりに単純であろう。新左翼諸党派をふくめて、日本の労働者階級全体の政治的水準のひくさが、われわれの肩の上に重くのしかかってきているのである。

この問題を他方の側面からみるならば、日本の階級闘争のなかにしめる労働者階級の比重の圧倒的重さである。工場・鉱山・作業場においてかくも民主主義がふみにじられ、自由がうしなわれているとき、ひとり学生戦線のみ孤塁を守りぬくことは、所詮不可能であった。

学生戦線の前進が労働戦線に影響をおよぼし、相互に浸透しあい全体として発展していくのが具体的な形態であるが、労働者階級の階級的力量の向上が決定的である。学生戦線だけが突出して自由と民主主義を享受できるというのは、幻想にすぎないことが明らかとなった。しかしこのことから敗北主義におちいる必要は少しもない。どんな困難ななかでも労働者階級は闘いをやめなかったし、階級的力量を蓄積しつつある。

「全学連の先進的な実力闘争に連帯しよう」との合言葉でうまれた反戦青年委員会は、たとえまだ全体としてみたら少数で影響力は少さいとはいえ、労働者階級のなかの最左翼の部隊として着実に発展している。

（三）

機動隊にバリケードを破られた大学では、旧秩序の復活と上からの「改革」が進行している。企業では労働者にそれぞれにことなった職務権限と、ことなった職務評価を与え、その枠内での自由を許し、あるばあいにはその枠内で企業に対する忠誠を奨励したりさえする。こうして労働者に一定の枠内の自由を与えながら、その枠内に一人一人をとじこめ分断し、全体として支配体制の下におさえこもうとしている。型式はかわっていても、このような内容をもった「改革」が、各大学でだされ、支配秩序の再編成が進行している。

この状態は悲しむべきことかもしれない。しかしここで大学はじめて工場、鉱山、企業と等質性をもつことになったのである。その結果、労働者階級との連帯がより容易になり、労働者階級からより沢山学ぶことができるようになったのである。

現在の学生、大学教職員は、労働者階級の闘争から学ばなければならないし、学ぶことも非常に多いはずである。運動の高揚期に闘いのなかにとび込み、初めて敗北の苦汁を味わった若者たちは、意気消沈するかもしれない。しかし冷静になって周囲を見るならば、この情況のなかで、はじめて労働者階級のおかれている状態がよくわかるはずだし、厳しい条件のなかで地味ではあるが、長期にわたって闘いを堅持している労働者から学びとることによって、自己の闘争を総括し、あらたな前進のみちもひらけてくるだろう。

労働者階級の闘争から学ぶものは、組織形態や戦術に限られてはならない。学ぶべきことはもっともっと初歩的で平凡な問題である。新左翼諸党派が、自分のまわりにいるもの、思想が一致する少数のものだけをあつめ、少数で突出した先鋭的な闘争を展開する時代は、とうにすぎさっている。日本の労働者階級全体をひきつけ、指導すべき時期にきている。学生運動の発展もこのなかでのみ可能となるであろう。

そのためには労働者階級が日常不断におこなっている平凡な大衆運動から、豊富な教訓がえられるはずである。

厳しい情勢のなかで、永年にわたって闘いを堅持してきた、労働者階級の闘いの経験から学ぶならば、学園の闘争が必ず一層発展した高揚期をむかえることは明らかである。（W）

カマと竹ヤリの闘魂

―三里塚のたたかい―

　次の文章は三里塚闘争連絡会議がだした「カマと竹ヤリの闘魂―三里塚のたたかい―」の全文である（資料をのぞく）。反対同盟一三〇戸を中核に、政府公団、警察をむこうにまわして、三里塚空港反対闘争はいよいよ決戦の段階をむかえた。三年有余にわたって、学生、青年労働者の支援をうけ、日共代々木派を追放して、権力との熾烈な闘いをつづけてきた三里塚の闘う農民から学ぶものは非常に多い。三里塚闘争連絡会議は三年間にわたり現地に入り、農民の家にとまり、一緒に食事をし、農作業をするなかで、この闘争にとりくんできた。工作の範囲は反対同盟にとどまらず、条件派のなかにも入り、今では動揺する条件派の心の支えとなって、地元農民の信頼をえている。

　この文章は、三里塚闘争の視野を軍事空港に局限していない。三里塚闘争の直接的な課題は、農民の土地を政府公団の略奪から守ることであり、その点から三里塚闘争は土地・農業・農民をめぐる階級闘争である。しかしそれだけではない。三里塚空港は政府・独占体の地域総合開発計画の一環として、その計画の目玉としてだされてきている。それ故三里塚空港反対闘争は、具体的には北総地域総合開発計画と対決せざるをえない。三里塚の軍事空港としての性格は、これらの日本帝国主義の政策全体の集中点として存在している。三里塚農民が日本帝国主義権力と対決する闘いを組織するには、このような敵の政策の全面的は暴露を必要としている。

　この文章は、これらを机上の理論からくみたてたのではなく、農民との対話のなかから、彼らの要求を解決する立場から出発している。闘争の経験を総括するなかから、基地闘争のもつ政治的経済的内実をひとつひとつ暴露し、農民の要求がもっている政治的経済的意義を明らかにし、三里塚農民の要求がなぜ日帝との全面的な対決をひきおこさざるをえないのかを、明らかにしている。

　この文章は今後各地で展開される基地闘争、地域総合開発計画、高速道路などに対する闘争を組織するうえで、学ぶところが非常に多いと思われる。今後三回にわたって掲載する。＝編集部

はじめに

同志諸君！

　われわれが「三里塚闘争の本質」―天浪・駒井野闘争の六カ月というパンフレットを出して三里塚闘争に対するわれわれの見解を公けにしてからすでに半年以上が経過した。

　当時われわれはまだ常駐体制に入ったばかりだったこと、また三里塚へ入って何をするのか？　われわれの思想工作方法と態度といった問題で緊急に意志統一を行なわなければならなかった必要上空港の本質そのものよりもむしろ態度や方法の問題に力点がおかれていて、成田空港そのものの実体にはふれていない。

　われわれは、今回決戦期に突入し、今やた単に、一〇六五ヘクタール内にとどまることなく、日本階級闘争の重要な結節点として反動勢力と進歩勢力・革命勢力の総力をあげた対決へと発展しつつある情勢をふまえ、パンフレットの第二集を発行する。

　もとより、われわれの調査や実践も部分的なものであり、かつ一時的なものにすぎないから、欠点や誤りも多いと思う。それは今後の実践の中で読者諸氏と共により全面的なものに、より実際の状況を正しく反映したものへと作りかえていきたい。

　われわれは過去の小さな実践の中でわれわれがいかに頭でっかちで観念的であるか、われわれの立場がいかに未熟であるかをいやという程知らされた。われわれが誤った立場・観点で行動を起した場合、必ずそれは大衆的に反発されわれわれは身体ごと痛い目にあった。われわれは胸に感じたその痛みを通して発言しようと思う。

　われわれは同じ闘いにある同志たちと原則的問題で意見が異なった局面を何回か経過してきた。

　われわれはその事も正直に提起したいと思う。他の様々な階級闘争の渦中にある同志諸君にとっても決してそれは無意味ではないと思うからである。

　パンフ第一集は主として第一期工事四〇〇〇メートルマスタープランを阻止する上で用地内工作を中心にすすめる上からその内容も限定されている。前パンフの内容は次の通りである。

一、駒井野・天浪闘争の六カ月と教訓

　Ⅰ　実際から出発する

　(イ)　四〇〇メートル用地内には反対同盟が少ないゆえ、あらゆる抵抗のエネルギーを発揮させ用地内農民の決起を促すこと。

　(ロ)　階級分析を加え貧農・労働者のヘゲモニーを増大すること。単なる生活防衛的意識に闘争をとどまらせてはならないこと。

　(ハ)　生活の問題にいたるまで具体的な状況から出発し、農民の思想感情をよく理解してそこに立脚しなければならない。

　Ⅱ　敵と闘うために共同する

　"対敵共同"は、まず統一と団結＝全民主勢力の団結が勝利の保障といった観点ではなく、敵と闘う中にこそ真の団結の基盤があり、われわれは闘争の利益・人民の利益から出発すべきでセクト的な利益から出発すべきではない。

　Ⅲ　われわれは大衆の自覚性に依拠しなければならない

　大衆の中にある積極的な芽を断固擁護し発展させるようにする。「人民戦争は大衆の戦争であり戦争をするには大衆に依拠し、大衆を動員する以外にない」という観点を徹底させることについて。

　Ⅲ　用地内闘争の経過

二、三里塚闘争の本質

　イ　政治的背景

　ロ　七〇年に向う人民の闘争上の意義

三、三里塚闘争と安保

付　騒音、賛成反対形勢図、駒井野、天浪の地図

　今回われわれは以上の問題については重複を避けつつ問題を提起する。以上の問題の他に、"なぜ三里塚闘争は重要なのか？" "何故に三里塚闘争は全人民が自己の問題として取り組まなければならないか"を明らかにしたい。

　それは基本的には次の二つの点に集約される。(イ)新空港は用地内農民・周辺住民及び日本人民の利益を犠牲にして作られ、アジア人民抑圧の拠点だからである。(ロ)第二は反対同盟を中軸にした実力闘争が七〇年代階級闘争を領導する質を持っていることである。要するに一つは、人民を犠牲にし、二つは闘争がすばらしいという点につきる。ではどのようにか？

　われわれの考えを前もって簡単にスケッチしておきたい。

　現局面における日本帝国主義はアメリカ帝国主義への従属の下でアメ帝のアジア戦略に全体としては従いつつ"火中の栗をひろう"形で新たな「大東亜共栄圏」をめざしている。

　アメ帝のドルと核のカサの下で日本独占資本が生きる道はアメ帝との軍事的対決に到る方向ではなく、正に"火中の栗をひろい"日米パートナーシップを発揮して、侵略加担、「防衛」力肩代りを強化していく方向である。

　以上の点からして、日本はアメ帝に対する被抑圧民族であると同時に、アジアに対する抑圧民族である。われわれはこの日本の民族問題、即ち抑圧されつつ抑圧するという関係は国内では、農民問題にかなりしわよせされていると考える。アメ帝への資本・技術・原料・市場の従属関係とアジアに対する日本独占資本の経済侵略は不可避的に農業破壊と農民の切り捨て、農村の荒廃を作りだしている。

　このような中に三里塚闘争を置いて考えるならば、それは、独占資本の農村支配、農民切り捨てに対決する闘争の頂点にある。

　千葉県内で考えれば、北総台地のほぼ中央に位置するこの地帯の農民は、北の鹿島工業地帯、南の京葉、京浜工業地帯へ分解吸収されていく渦中にある。大きくは首都圏整備計画、小さくは北総開発計画の中で三里塚一帯の農村は解体され、農民は不断に低れんなプロレタリアートに解体されていく。これは七〇年代の典型的パターンだと考えるし、われわれはこのことを明らかにしていく。

同志諸君！

　ともあれ、情勢は急をつげている。九月十三日政府・公団は土地収用法適用の第一段階として、運輸省への事業認定の申請に踏み切った。そして、先立つ九月八日未明には、三〇〇余の機動隊私服を動員し、反対同盟青行隊の幹部・活動家に対するねらい打ち逮捕という政治的弾圧をかけてきた。

　決戦の火ぶたはすでに切っておとされたのだ。

　われわれに四年有余におよぶ闘いの教訓を正しく踏まえ、全国の先進的経験を持ちより、労・農・学の革命的精神と英知を結集し、最後の勝利を闘いとらねばならない。

同志諸君！
全力を挙げて空港粉砕をかちとろう！
闘う現地三里塚へ結集せよ！
七〇年安保粉砕！
七〇年代階級闘争へ進撃せよ！

空港反対
絶対
農地死守

一、破壊される農業　収奪される農民

冷害

　「今年の稲はどうもあんまりうまかあねえなあ」そんな声がささやかれ出したのが七月上旬のころだった。

　それが今取り入れになって「とんでもねえこんだよまったく」という声が三里塚地区のあちこちから聞えてくる。田んぼの稲はみんな立って先の方は白くなっている。普通なら、もみの重みでたわんで首をたれているのだ。それが今年は、稲の花が咲くだいじな時期に気温が上らず雨ばかり降って交媒しなく実が入らなかったのである。葉の方は、青々と茂っているのに先の方は軽い。稲刈りの方にもこれでは身が入らないのである。今年の早稲の収穫はきわめて悪かった。全国的な早場米地帯の北総一帯は大打撃を受けたのである。

　「反よくて四、五俵だなあ」―われわれには信じられなかったが実際に刈り入れてみたら本当に二俵前後しか取れない田がかなりあった。例年は反七、八俵以上取れるのに今年は冷害なのである。

　われわれはここ三年来現地でなれない手つきで援農を続けてきて"農業労働は大変だなあ"という腹の底からの実感を持っている。

　稲の刈り入れまで今春より、田おこし→あぜぬり→苗床作り→田植え→草とり→消毒→刈り入れ→乾燥→脱穀と大変な労力を投入してきた。

　そして、収穫に当ってこのざまである。

　われわれの脳裏をきびしかった作業の一つ一つが走った。

　"農業労働は厳しく、農民の収奪はひどい！"こうした考えをわれわれは文字通り理論でなく身体で感じることができるのである。

作業の教訓から

　もう一つ例を出したい。

　今春われわれは、田に"土入れ"という作業を行なった。それは、地域ボスにだまされたり、公団の甘言に乗ったりして条件派となったが、"こんなはずではなかった"と気付いてきた農民との団結を固めることが主要な目標であったが、この"土入れ"で疲れた土質に活力ができ茎の強い稲ができ、反当り一俵ぐらいの増収になるのである。それをやればいいことはみんな分っていても労力がないからできない。どの位の労力がいるか？　われわれは三反位の田に"土入れ"を行なうのに三日間延べ五〇人の動員を行なった。それが前述の冷害でふいになったが予定通り反当り一俵の増収としても三俵で一俵八千円として二万四千円にしかならない。われわれは当時それなら"東京でアルバイトでもすれば同じ条件で最低五、六万円になるからそれをカンパした方がいいなあ"とじょう談まじりに語り合ったものである。

　われわれは、このような具体的事実の中から、現在の農業と農民はどんな運命にあるかはっきりと知ることができる。

両極分解する農民

　第一表をみていただきたい。これは千葉県における耕地規模別農家数の変化である。一見して分ることは、一・五ヘクタールを境にして、それ以下は減少の傾向をたどり、それ以上は若干の増加を示していることである。

　六〇年安保の成立と同時に発表された、池田内閣の高度経済成長政策にマッチした農業基本法の構想は貧農を切り捨て、富農を育成し、中農を両極分解させ、六〇〇万農民を切り捨てて低廉な労働者として使うというものであったがそれはこうした数字の中にはっきり見てとることができる。しかしその幅が小さいではないかというものがいるとしたら、それは何とかして土地を手離すまいとする農民の抵抗の表われなのだということをみておかなければならない。これこそ、農基法立案者の一人である東畑四郎をして"農基法は失敗した"と語らしめた支配者の誤算であるにすぎないからである。

　しかしながら、このような分解は今後急速にしかも加速度的に進行していくだろうことをわれわれは、はっきりみておかなければならないし、三里塚一帯は、空港ができることにより階層に関係なく農業それ自体が破壊されてしまうのだということを、後程詳しくみてみたい。

同じ運命を負う、全国農民

　今年四月一日、一瞬にして八人の尊い人命を奪った荒川放水路の間組架橋工事事故の模様を記憶にとどめているものもあると思う。当日の毎日新聞は次のように伝えている。

　「ドドーッという地鳴りがして荒川放水路のどまんなかから十メートル近い水柱が立った。『川津波だーッ』『早く逃げろ』―。一日夕、東京荒川放水路の新四ツ木橋上り線の橋脚工事現場で起った作業員八人生き埋め事故は現場の人たちを恐怖のどん底におとしこんだ―」八人の作業員は「……穴に降りるための安全施設『はしご』だけが保障され、出水などで避難する施設は命綱さえなかった」この八人中七人までは青森県からの出かせぎ農民だった。リンゴの大暴落でかさむ借金をかかえて、季節労働に出ざるを得なかった。「給料をもらうと一日二百円の食費を間組に支払い、残りはほとんど送金していた。遊びといえばたまに酒をくみかわし、故郷の民謡を合唱する程度だったという。押入れには故郷へ帰る"晴れ着"の背広がキチンと折りたたまれ、家族の写真がそっと乗せてあった。―」（毎日）

　ここには、佐藤政府の農業政策の本質がはっきり現われている。独占資本の"高度成長"の陰に、この事件のように郷里で変わりはてた父親を迎えて「こんどは、お父のかわりに、おれが東京にかせぎにいく……」と叫ぶ幼い男の子があるという関係が進行しているのだ。

第一表　経営耕地規模別農家数（千葉県新長期計画書）

区分	総農家数	0.3ha未満	0.3〜0.5ha	0.5〜1.0ha	1.0〜1.5ha	1.5〜2.0ha	2.0〜3.0ha	3.0以上	その他
戸数　35年	181,899	23,651	23,224	55,865	46,399	22,603	8,753	537	867
（戸）　40年	173,023	21,263	22,539	51,798	43,581	22,845	9,709	673	615

苦しさ増す家計

　第二表を見ればきわめてはっきりするように農家の累積赤字は年々ふえる一方であり、「買うものは独占価格で買わされ、売るものは安く買いたたかれる。百姓は売るものも買うものも自分で値段つけるものはねえだよ」と農民はその関係を語る。

第二表　全国農家一戸の平均収支
（農林統計）　（単位千円）

年次	50〜52	57〜59	64〜66
農業所得	177	199.8	365.8
家計費	214.6	328.2	654.7

　営農資金や生活費に背負いこんだ借金は農民の現在の労働力だけでなく、将来の労働力を売って現在の生活を立てざるを得ない状況を反映している。

　独占資本の過剰生産恐慌への一つの対応策としての「月賦販売」が労働者の将来の労働で現在の商品を消化する手段にすぎないように、かさむ家計費の赤字は"去るも地獄、残るも地獄"の農村の状況を反映しているのである。

毎年八十万人が切捨て

　日本の総人口は毎年一％ずつ増加の傾向を示している中にあって農家人口は約八〇万人ずつ減っている。一九五〇年には三八〇〇万人で総人口の四六・二％を占めていた農家人口は約一〇〇〇万切り捨てられて、六六年には二八六四万人となり二八・九％となっている。

　さらに、兼業者をも含めた農業従事者の数は非農業部門が三％以上の増加を示している中にあって、三％以上の減少率を示している。一九五六年には三七％を占めた総就業人口との割合も六六年で二三％となり、現在は二〇％も割っていると考えられる。

専業から兼業農家へ

　農家の中でも農業に専従するものの数は急速に減っている。兼業

（四面へつづく）

再び門前抗議集会

前原君を守る会　内部も呼応し行動

十・二一の国際反戦デーを前に、十月十五日「前原君を守る会」主催の呼びかけで、再び、三菱電機伊丹製作所の正門前で、抗議集会とデモを行なった。

当日午後五時「前原君を守る会」や、各地域反戦青年委員会、電機社研に結集する青年労働者約一〇〇名は、宮前神社に集合。「前原君の不当解雇撤回、三菱の軍需生産阻止」「安保粉砕」を叫び完全武装の機動隊と対決しながら三菱電機正門までデモを行なった。

閉鎖された正門入口の道路には柵がはられ、守衛だけでなく機動隊が居並ぶ前でデモを敢行し、ここで一時間ちかく集会をひらいた。集会では、三菱電機の労働者をはじめ、電機産業の労働者、各地区反戦青年委員会の代表などが演説し、前原君の解雇に対して憤りをもって三菱独占に抗議するとともに、十・十一月闘争を断固闘いぬく決意をのべた。

この抗議集会、デモに先だつ、十四・十五の二日間「正門閉鎖を突破しよう」と、労働者に対する呼びかけの「守る会」のビラが「前原君を守る会」に結集している、三菱電機の先進的労働者の手によって、公然とまかれ、労働者を勇気ずけた。

三菱電機の戦闘的な労働者と「前原君を守る会」の強固な闘いにおびえる三菱独占は、前回の門前集会以後正門閉鎖だけでは手ぬるしと、正門から産業道路に通じる道を、会社の「私有地」ということで、ブロックの塀を築いて閉鎖し、近所のアパートの人々には通行証を発行するなどし、さらに職場でも総務の職制が活動家を呼びだし、〃就業規則違反だ〃とおどしをかけ、闘争に水をさし、抗議闘争をつぶすことに、やっきになっている。

また当日の十五日には「唐手大会」が開かれることになっていたが、始め会社は「唐手大会」を中止させようとした。だが大会に出場する労働者の抗議により体育館の使用をしぶしぶ認めざるをえなかった。

これは「守る会」が〃正門閉鎖は不当であり、すべてが会社の責任である〃という説得を行った結果、唐手部員が会社に抗議を行ない勝取ったものである。

このような会社の妨害にもめげず当日の闘いには、約一〇〇名近くの労働者が〃正門を通せ〃と正門に集り「前原君不当解雇撤回、軍需生産阻止、安保粉砕」を叫んで、内部でも抗議集会を行なった。

国際空港反対で集会

三里塚の経験に学ぶ淡路島

関西財界や自民党が新関西国際空港建設の予定地にあげ、誘致運動をおこなっている兵庫県淡路島三原町で、この計画に反対するための集会がおこなわれ、多数の地元住民が参加した。

淡路島の空港建設反対運動はいままで北部の建設予定地周辺でくりひろげられてきたが、最も住民の多い南部で集会がもたれたのは始めてで、建設予定地から六十㌔あまりもはなれているため、関心がうすいと思われていたこの地方の人たちの間に、関心がひろまりつつある。

この集会では映画「三里塚の夏」をみた後、三里塚闘争連絡会議の佐山氏が三里塚闘争の経験を語り、建設予定地である北淡町久能野の裏井氏が始めになぜ新国際空港建設に反対するのか説明の後、討論にうつったが、地元の参加者から、三里塚における空港関連事業の地元負担金、騒音・汚水による公害、用水の問題[illegible]と質問がだされ、質疑がおこなわれた。

久能野部落の代表裏井氏は、この部落ぐるみ空港反対を決定した集会で反対する理由などについて次のように発言した。

われわれは空港建設に対する態度をきめるまえに、伊丹空港へいって、実際に調査した。

滑走路から四百㍍はなれている神津小学校だけが、一億二千五百万円で防音設備をした。たしかに教室のなかでは爆音はきこえないが、体操の時間はマイクなしで授業ができない。冷暖房つきのこの学校の電気使用量は、他の学校の十倍。

空港から四㌔はなれた久代小学校では、飛行機がとぶと職員室で向かい合って話ができない。統計をとったところ、火曜日は一番多くて一時間に八回、六時限までに二七回、二十～三十秒間授業が中断する。一番少ない土曜でも昼までに八回の中断。防音設備はもちろんなし。

空港周辺の少数の家でテレビ受信料の半額免除があるだけ。滑走路から百㍍はなれたところにある中村部落では、土地代が安いため住んでいる人があるが、小供は全然勉強できないし、赤ん坊は寝れないため、ひきつけをおこしている。

空港から三・五㌔はなれている天神川小学校の付近では、丁度真上を飛行機が旋回するところで、その音は屋根に大きなサイレンをつけたような感じ。

淡路にくるSSTは現在のジェット機よりずっと大型で、低くとぶので（上昇率は現在のジェット旅客機の五十分の一）、騒音の大きさも範囲も、伊丹よりひどいことはあきらかだ。

旅客機だけなら昼間しかとばないから夜は騒音はないはずだが、夜間も休む間がなく飛行機が発着している。それは伊丹空港にアメリカの軍用機が発着しているからだ。

淡路に空港ができれば人は住めなくなるし、戦争の危険のある空港を作って欲しくない。

三池労組

官僚化との闘い

形式的な三本線を打破れ

右傾化する民同路線にのった三池労組のなかにあって、職場における大衆的な実力闘争路線を堅持してきた宮浦指導部に対して、三井炭鉱独占は、宮浦指導部長の藤沢孝雄氏をはじめとする活動家八名を、七月二十二日解雇した（本紙三六号で既報）。三池労組指導部のなかで、この会社の攻撃に腰を抜かした一部の動揺分子は、解雇された組合員を擁護し、団結をさらにつよめて、独占資本と闘かおうとせず「藤沢らはハネ上りだから」「三池労組内にはもともと二つの路線があった」などと中傷した。

さらに八月初めにおこなわれた組合役員選挙では、宮浦指導部長に立候補した藤沢氏に対して対立候補をぶつけ「藤沢が当選したら炭労からの救済基金の支給は打切られる」などの噂が流れた。その後動揺分子が組合指導部の権威を笠にきて、組合内の批判をおさえ三池労組をますます右傾化させようとするのに反対して、社青同宮浦班に結集する活動家は、敵の厳しい攻撃の前に動揺し、利敵行為をした三池労組の中屋総務部長（社会党三池支部長を兼任）に対して、公然と批判し、闘いに立上っている。

五二年の六三日スト以後、日本の労働運動の先頭に立って長期間のストライキ闘争をたたかい抜いてきた三池労組では、組合員の指導部に対する信頼はつよく、会社と第二組合幹部の厳しい分裂攻撃に対して、鉄の団結をもって対抗し、組織を防衛してきた。そのため組合員が指導部を公然と批判することは、三池労組ではいままでタブーとされてきたが、これを破って敢えて公然と組合内に論争を提起したことは画期的なことであり、三池労組の戦闘的団結と強化のために大きな役割をはたすであろう。

次は「この形式的三本線を打ち破ろう！」と題する社青同宮浦班のだしたビラの全文である。このビラの始めにでている堤さんの訴えとは、組合書記をしていた堤さんが、組合員の減少のため解雇を中屋総務部長からいいわたされたのに対して、賃金を下げても現行の図書係と生協の仕事をやらせてほしいと、ビラで組合員に訴えたことをさしている。

八名の解雇者は苦しい生活のなかで、解雇を撤回させ、三池労組の戦闘的強化のために、現地で闘いをつづけており、全国の闘う労働者、学生、市民からの連帯のカンパを求めている。

カンパの送り先＝大牟田市新勝立町紅葉ケ丘三
三　藤沢孝雄

いま、三池宮浦指導部では図書館事務員の人員減をめぐり、執行部提案と堤さんの訴えで大衆討議が行なわれている。『今期の組合改選をめぐりシコリがのこっているとき、さらに問題を投げかけた堤さんの行動は許されない』という人々と『それは指導部の提案そのものに問題があるから、堤さんの訴えとなった』のであると、今また指導部内では不団結が拡がっている。

私たちは、この問題をめぐる本質を大胆に明らかにし、不団結の要因を克服することなしに三池宮浦指導部の真の統一と団結を確立し、敵の攻撃からの『生命を守る闘い』を一歩も進めることはできないと考え、ここで『なぜ、堤さんが心からの訴えを出したのか』を理解する必要があると思う。

一、執行部は『指導部財政が赤字なので、組合書記と図書館事務員を整理し、アルバイト一名を置くことにする。堤さんが勤まらなければ新らしく採用する。三日後には返事をしなさい』と堤さんに申し渡しているが、これは赤字なら首切り、労働強化、一〇時間勤務と不删れな経理など、やむなしという三井の考えと同じである。

二、『図書館事務員を置くためには、図書費一〇円の値上げをしなければならないが、利用者が少ないからそれはできない』という中屋総務部長の考えは、解雇を前提としているし、生協など組合員に対する奉仕を通じて闘いをささえている仲間に対する同志愛の片鱗も見られない。まして大衆討議にもかけずに、独断で『図書費の値上げはできない』と決めつけるのは大衆軽視であり、官僚的である。

三、堤さんが、尊い組合員の金で生活をしているという自覚のもとに『最悪の場合は、給料を下げても良いから働かせてほしい』という意見具申を黙殺する態度は『死ぬのはイヤだ！』という私たちの最低の要求すら弾圧した三井と同じである。

四、一人になったら、いままでのように組合員の闘いをささえる奉仕ができない（生協のカケ売中止など）という堤さんの心配を無視する態度も、赤字なら労働者の利益は失われてもよいという三井と同じである。

五、堤さんの〃生きるための最底の願いを黙殺〃したのみか『三日のうちに返事をしない』というやり方は、解雇の事前通告（三十日間）の義務づけをした基準法すらふみにじる非人間的なものであると同時に、大衆討議を形式化した官僚主義思想である。

だから、堤さんはだまりかねて『訴え』を出したものと考る。以上で明らかなように、執行部の提案態度は、三井と全く同じものであり、いわゆる『労働官僚』である。

書記をアルバイトに格下げし、労働強化を押しつけても、全組合員の生活は大事にしたいという執行部の思想は、十年前『小の虫を殺しても、大の虫を生かす』といって裏切った三池新労幹部と少しもかわらないものである。

したがって、堤さんの問題は、堤さん個人の問題ではなく、今次宮浦闘争を『行き過ぎ（ハネ上り）だ』として誹謗し、口を開けば『二つの路線があった』と批判をしてきた現執行部の路線とは、こうした具体的事実の中で立証されつつあるように、官僚主義であり、闘いの中で生まれる同志愛までも奪うファッショである。更に重要なことは労働組合の命である〃組合民主主義〃の原則を踏みにじっていることである。

堤さんの〃心からの訴え〃についての執行部の取り調べで『この資料は誰れがおしえたのか』『誰れたちが配ったか』『いわんなら緊急指導部委員会を開くことになるかも知れん』と脅迫した中屋総務部長の態度は、口で団結をときながら労働者を敵にまわす戦時中の特高であり、労働者をバラバラにしてしまう恐るべきファッショである。

この態度は『たった一人の首や生命であっても、三井に奪われない』と、団結して闘ってきた三池の三本線とは縁もゆかりもない、労働官僚ファッショ路線である。三井の弾圧と闘わず、『犠牲なき闘い』というのは敵前逃亡路線（三池新労と同じ）である。とくに悪質なことは、組合員大衆に向ってはことばたくみに統一と団結を強調する宮浦指導部の新路線の撤廃こそ、不団結と不安感を拡めている原因であることを大胆に指摘するものである。

堤さんの組合を思う訴えや、私たちの正しい批判を、『執行部を攻撃する感情論だ』として圧殺しようとする態度こそ、かつて〃問答無用〃と人民の自由を抹殺したファッショの独裁的感情論である。そしてこの態度は、こんどの組合役選を通じて見られたように党の支部長でありながら、党決定に従がわず『藤沢が当選したら、私は辞めて田舎に帰る』と主張して組合員を脅迫した態度に始まるのであり、それは組合民主主義の蹂躙であると同時に、典型的な感情論というべきではないだろうか。堤さんの〃心からの訴え〃による問題提起を怖れるゆえんはここにある。

もし、『統一と団結』の美名のもとに、執行部に盲従し、不団結と不安感の要因を明らかにせず、真の団結を確立しないならば、今や十年の苦闘も水泡に帰し、三池新労にアザ笑われ、ヤマを去るか奴隷として殺されるか、の二つしかないだろう。

今こそ、全組合員は勇気をもって、文字通り『形式的な三本線を打ち破る』ために総決起しよう！

七〇年代安保体制の中で、労組幹部が官僚化するなら、労働者の『いのちと団結』は死滅する。

労働者のいのちである団結を強めるためには、組合民主主義を確立しなければならない。

私の発言

10・10東京集会に参加して

地方公務員　玉部　保夫　23才

東京に着いてすぐ「ベトナム反戦・安保粉砕・沖縄闘争勝利・羽田闘争二周年、10・10青年労働者総決起集会」に参加した。

日比谷野外音楽堂で開かれたこの集会は、全国二十五都道府県の地域反戦、職場反戦が結集して、全国反戦青年委員会の再建を期す集会であり社・共・総評の締めつけを自らの意志ではねのけた、闘う青年労働者約一万四千名が参加した。

動力車労組、自治労の組織参加を含めて、昨年を大きく上回った動員数はわれわれ反戦派労働者の今後の闘いを非常に大きく勇気づけるものであった。

しかし反面、背負った課題の大きさに比例して、自分の中にある一つの大きな問題、すなわち、反戦派労働者として、現在なにをしなければならないのか。神戸での反戦派労働者の生産点での実力闘争の弱さや、街頭闘争への結集の弱さ、そして結果的には労組内左派としてしか動いていない自分の職場……。どうするのか？

これらの問題が集会の間ずっと頭から離れず、集会に参加している人びとは、これらをどのようにして克服したのか、あるいは、どのように闘っているのか、を問いつづけたが、とうとうわからずに終ってしまった。

しかし、あせってはいけない。これらを教えてもらおうと、期待する方がおかしいのかもしれない、と自分に言い聞かす。

日比谷公園を出てデモ行進。統一集会の会場である明治公園に向かう。人数が多いためか、機動隊の姿もすくないようにみえる。神戸でのデモほど足がふるえない。

動力車労組の仲間はヘルメットなしだが非常にすばらしい。

明治公園は旗、旗、旗。そして人、人、人。約十万人いるとか。統一集会が開かれているところもわからない。

ヘリコプターが五機、低空で飛び回り、ほとんど何も聞えない。

各反戦、全共闘、ベ平連などがあちこちで集会をしている。「意義なし」「ナンセンス」の声だけがよく聞える。

想像していたのと随分ちがうが、緊張感だけは持ち続けている。

四時半すぎ、学生部隊からデモに移りだす。われわれもスクラムを組み「安保粉砕」「防米阻止」を呼びながら公園の中をぐるぐる回る。やっと外に出ると機動隊と対面、押されて反対の方向へジグザグ。そのあとは青山二丁目まで道路を完全に占拠。フランスデモジグザグと自由自在。どこにも機動隊はいない。

しかし、国会議事堂がかすかに見える所から官庁街にかかると、真黒に見えるくらい機動隊がおり、強い規制をうける。やはりこの時が最もデモをしている感じになったし恐しいけれども気持もよい。

やっとのことで日比谷公園についたのが午後八時だった。

とりとめない文章になったが、これが僕の感じたものであり、自分もこの集会の参加者の一人でありながら、何かもの足りないものが残っているのに苦労するくらいへとへとなのに……。

アル・ファタ

パレスチナ革命的解放戦線

パレスチナ革命的解放戦線（アル・ファタ）はここに初めて世界の新聞に国際的コミュニケを送り自らの運動と、現在イスラエル侵略者に対してアラブ・パレスチナ人民によって行なわれている戦いに関して、ある種の誤解があるがその誤解を晴らし、立場を明確にしたいと思う。

パレチナ問題は本質的には全人民の問題、イスラエルを作るために略奪され、故郷を追われたパレチナのアラブ大衆の問題である。一九六七年の六月の侵略前には、ほとんど百五十万人近くのアラブ系パレスチナ人が止むなく、アラブ世界いたるところにある、数々の収容所でひ難民として生活を余儀なくされ、イスラエル内部で生き残っている三十万人は、イスラエル政権によって酷く差別され、仕事と教育の機会を凡ゆる人間的権利一切を拒否されているのである。二十年間というものイスラエルは、自らの故郷へ帰りたいというアラブひ難民の絶えざる訴えを拒絶してきたのである。

国連軍

最初、追放され、苦難をなめているパレスチナ人民は、国際連合にこの悲劇を解決してもらおうとした。しかしこの国際機関は二十年間彼らの問題解決に何事もなし得なかった。さらに、ひ難民は故郷へ帰えることをゆるされるか、若しくは補助を与えられるべきである、という機関のいくたの決定は、どれひとつ履行されなかった。その間もイスラエルは絶えず拡大政策を企てては実行にうつしていた。一九五六年の三カ国侵略で、イスラエルがシナイとガガ地方を、国連の退去警告にもかかわらず、四カ月間占領した時にも、その拡大政策の意図が現われており、同じことが六月侵略の後で、すべての国際法を無視し、国連憲章、ジュネーブ協定、人権宣言をまるで蹂躙して、ヨルダン河の西岸、ガガ地帯、シリアの南部、エルサレム聖地を無法にも併合したときにもいえる。今日国連は占領地区よりの侵略者を撤収させることに関して、なんらの合意にたっすることもなく、パレスチナ悲劇解決にあたって全くの不能力を暴露したといえよう。

反革命軍

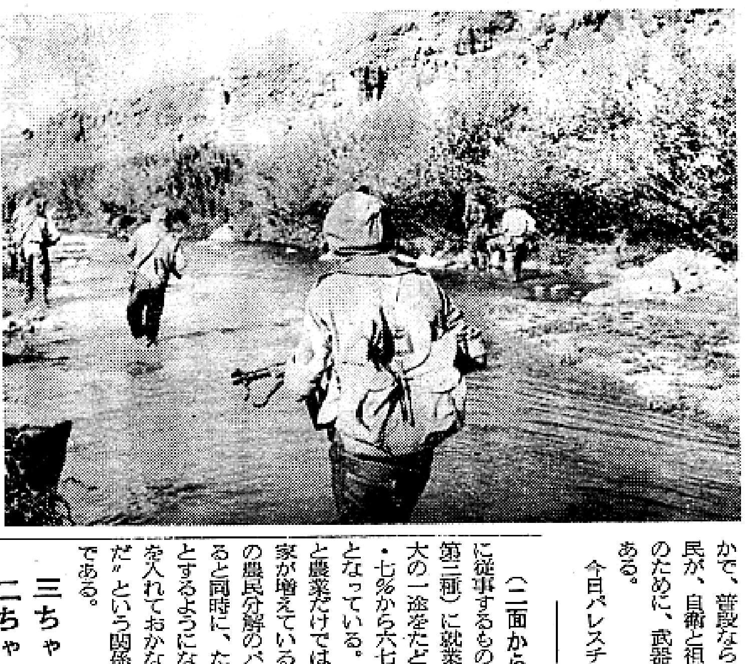
ここ数年にわたりパレスチナ問題を、私利益のために食いものにした、アラブ人指導者がいたことを認めねばなるまい。さらに相次ぐアラブ頂上会談も、パレスチナ人民に正当な支援を与えるまでに達しなかった。同様にアーメッドシュカーリイに率いられるPLO（パレスチナ解放機構）もパレスチナ解放に失敗していることも認めねばならない。パレスチナの進歩的分子は心からPLOに、全人民を代表するようになって欲しがっているのだが、ある種の反動勢力が逆に、パレスチナ人民を支配する具に利用しようとしているのだ。今日ではこの擬似解放機構であるPLOは、最早パレスチナ解放では何らの意義ある役割も果していない。その理由は、大衆自らの中から生まれたものでなく、上から人為的に押しつけられたものであるためである。

永年にわたるパレスチナ人民の苦悩と不満は、イスラエル侵略者への人民の反感を正しく反映した真に大衆的で活動的な新しいパレスチナ解放戦線を生んだ。アル・ファタがそれである。占領地区でこっそりと活動していたのが、一九六五年からははっきりとゲリラ活動を始め、全アラブ世界を脅かし、われわれ人民の民族としての存在を抹消しようとする抑圧者たちを弱め、脅かすために、イスラエルの軍事的・戦略的設備・装置を破壊妨害した。六月侵略まではこれらの活動——始まるや直ちに全アラブ世界のアラブ・パレスチナ人民の熱心な支持を得た——は外側から行なわなければならなかった。しかし、六日間にわたる戦闘とそれがイスラエル内外の全パレスチナ人民にもたらした破壊的な影響のために、祖国解放の闘いに新しい条件が生れた。皮肉にもイスラエルが自分のものだと宣言した新しい国境線のために、パレスチナ人は前パレスチナの領土内に、共通の敵シオン主義者に面するようになった。その上、休戦後イスラエルがアラブ系住民に加えるファシスト的抑圧のため、ベトナムにおけるような抵抗運動が発生した。この反抑圧大衆運動はイスラエル自身も認めつつある。運動の大きさと具体的な現われは、最早イスラエルのスポークスマンも無視したり否定したり出来なくなっているのだ。

人民の動向

侵略直後アル・ファタは前占領地区並びに新占領地区で、アラブ人民を秘密裡に組織し始め、自分たちの手で祖国を解放する能力のあることに自信を持つようにはげました。パレスチス民族解放戦線＝アル・ファタを前衛として指導を仰ぎ、今や人民は敵のまっただなかで自分たちより格段に強力な軍事力を持つ敵にあらゆる手段で抵抗している。ストライキ、非協力、イスラエル商品のボイコット抑圧策と併合の拒否、等々。アル・ファタと共同して、政治家や宗教家は敵の法例の遂行を拒否し、教師は学校を開かず、学童は祖国がこの憎むべき敵の権力に支配されている限り、学校へは行かないのである。

この侵略後の期間、アル・ファタの武装部隊、アル・アシッファ（Al-Assifa）もまた、敵の軍事キャンプや店や発電所や鉄道などを含む装備・施設に対して、軍事的破壊工作を強化してきた。敵の経済力を弱め、わが人民を支配する力を弱化させてきたのである。イスラエルの各産業工場、出版社、行政センター、新占領地区に現在作られている準軍事的なキブチム（kibbutzim（訳者注）イスラエルにおける集合農場施設のこと）も、アル・ファタの突撃隊によって攻撃され、大きな損害と負傷者を出し、イスラエルに緊張をかもし出している。われわれ人民は奴隷生活を望まないならば他に辿るべき道はないと考えている。



イスラエルによる全パレスチナ占領のために、アル・ファタの最も重要にして長期間にわたる目的のひとつが可能となった——すなわちそのすべての軍事基地を占領された祖国内に移すことである。この移行は今では完了した。これらのたくみに隠蔽され、備えも充分な数多くの基地より、パレスチナ人の突撃隊——ほとんどが献身的な農民や学生である——が一日に何度となく、新旧占領地区で工作を続けている。すべてのイスラエル地区、すべてのイスラエル軍の設備、すべてのイスラエルの目標が彼らの攻撃範囲にあり、イスラエル体制は従っていつなんどき、その植民地主義者的存在の崩壊にでくわさなければならないか分らないのだ。このイスラエルのシオン主義者への脅威は、パレスチナがその正当な所有者、つまり、四千年の間絶えずユダヤ系少数者と共にその地に住み続けてきた、パレスチナアラブ人に帰えるまで続くであろう。

しかしながらアル・ファタは次のことを指摘しておきたい。すなわち現在全パレスチナ人民の支持を待っている活動・工作は決して過去数世紀にもわたり、ともに生活してきたユダヤ系小数者に対して向けられているものではないということを。また、決してそれらの人びとを「海へ追いやる」つもりもないことを。アル・ファタが共同して行っている、この抵抗と解放運動は主として、われわれの祖国を奪い、われわれの二百万人の人民を追い立て抑圧し、貧困と悲惨の生活を強いる、シオン主義者帝国主義的ファシストに向けられているのである。

また、アル・ファタは、この「テロリスト」運動がシリアやヨルダンやアルジェリアのような、外部の国によって扇動され指示されたものであるという、シオン主義者の宣伝をここできっぱりと訂正しておきたい。今日中東に存在する条件下では、そのような外国製の運動はながくつづかない。すぐに人民によって拒絶されてしまうからだ。それどころかパレスチナ人民の解放運動は、人民の極端な不満と自由・正義、自ら自身治めてきた歴史をもつ故国における尊厳とを求める、深い熱望から生れてきたのだ。だからこそ強力なのだ。

世界は過去二十年間イスラエルの存在のために最も苦しんできたのは、パレスチナ人民であることを思い起すべきである。そして世界は残虐なイスラエル抑圧者に対して、ゲリラ戦争をアル・ファタの指導のもとで団結し、勇敢に闘っているのはパレスチナ人民であることを思い起すべきである。ナパーム弾、猛砲撃、追い立て、即決処刑、略奪、残虐、投獄、冒とく、その他ここ数カ月に行なわれた、ファシスト・イスラエルによる数々の犯罪に対する人民の反感が、自然に武装蜂起に発展し、自分達の尊厳と奪われた権利を守ろうと立ち上ったのだ。アル・ファタのひきいる運動は人民の解放闘争の組織的な表現であって、その敵はファシストや帝国主義的侵略が行なわれているところなら——ベトナムにも、南アフリカにも、アンゴラにも、ボリビアにも、その他世界中いたるところに見い出される。それらの地域と同じく占領地区パレスチナでも、つつしまやかで、普段ならむしろ服従的な人民が、自衛と祖国の最終的な解放のために、武器を取っているのである。

今日パレスチナのアブラ人民は自らの運命を自らの手中に収める決意をした。今日、彼らは武器と勇気をもって、失なわれた尊厳を取り戻そうとしている。そして明日になれば、永い粘り強い闘いを幾多の犠牲者を出しながらも続け最後に——必ずやすべてのアラブ解放運動と世界中の進歩的な人々の支持を、得るに違いないこの戦いによって、彼らは愛する祖国、パレスチナを取り返すであろう。

アル・ファタならびに全パレスチナ人民は、彼ら人民の正義の蜂起と最後的な勝利を確信して疑わない。そしてパレスチナの旗が、解放され、民主的で平和な国土の上にひるがえる日にこそ、新しき時代が開け、そこではパレスチナのユダヤ人も本来の土地の住民、アラブパレスチナ人と仲良く調和を保って生活するようになるであろうことをも信じているのである。

（The Movement May 1969）中村久雄訳

（二面からつづく）

に従事するものと他の職業（第二第三種）に就業するものの数は増大の一途をたどり、六〇年の六五・七%から六七年には七七・八%となっている。いわば片手間農業と農業だけでは食っていけない農家が増えているのだ。これは現在の農民分解のパターンを示していると同時に、たとえ他の職業を主とするようになっても農業に片足を入れておかないと〝将来が不安だ〟という関係を反映しているのである。

三ちゃんから二ちゃんへ

一戸当りの農業就業者は六〇年の二・四人から六六年の一・九五人とますます減って、かつていわれた〝じいちゃん、ばあちゃん、かあちゃん〟の三ちゃん農業から現在は二ちゃん農業になっていることが分る。

そして、この二ちゃんは年寄りと女性の割合が増え、男性は四割強、六割近い女性も半分以上が三〇才から五〇才の女性で、一六から三〇才までの女性は、一五%しかなく、若い女性は農業から離れている。

さらに新学卒者の農家子弟をみても、六七年に中・高校を卒業した一二七万人のうち農業に就職したものは僅か六万人であり、五五年の二六万人に較べると四分の一になっている。

以上数字がかさんだが、要するに日本の農業は老齢化と女性化の傾向を強めつつ、一〇〇〇万強の人が一億の人口の腹を満しているという状況にあり、一人の労働で一〇人を養なっているのである。

また、米帝への従属とアジアへの侵略、抑圧という関係の中で農産物の輸入依存度はしだいに増加の傾向をみせており、二割から三割へその比率をふやしつつある。前述したリンゴ村の悲劇も台湾バナナにおされてやってゆけなくなった果樹園農民の話なのである。

農地収奪の激増

さてわれわれは、三里塚空港を頭に置きつつさまざまな角度から日本の農業と農民の運命の問題を考えてきた。

われわれは、最後に農地収奪の問題について調べてみたい。

米日独占資本は、一つは日本産業の重化学工業化と、侵略体制確立のために、もう一つは過剰生産恐慌をさけつつ彼らの独占利潤を確保するために全国にわたって大規模な土木事業を起している。

それらは、新産都市、工業整備特別地域、新幹線や高速道路の建設であり、首都圏整備や中部経済圏の建設であり、各地のニュータウン・多目的ダムや工業用水事業などであり、成田国際空港もその一つである。

「高度経済成長政策」の実施された六一年から六六年までの間に全国で合計一五万三〇〇〇ヘクタールの農地がこれらのために転用された。この広さは四国四県の全耕作面積に匹敵する。

政府独占の手段

そして、これらの収奪は、加速度的に進行しており、それを法制的に〝保障〟するために「土地収用法」の改悪をはかり、「首都圏整備法」、「近畿圏整備法」、「中部圏整備法」、「新住宅市街地開発法」、「新産都市計画法」、「工業整備特別地域整備法」、「河川法」などの法律をたてつづけに成立させ強権を発動して、土地と水を農民から取り上げる策動を強化しているのである。

千葉県の計画

「千葉県新長期計画書」（一九六九版）によれば、このような農地の収奪、水の収奪、農民の切りすては、工業の発展（独占の発展）にとって欠かせない条件であるとして次のように指摘している。「工業を囲む四囲の状況も楽観を許さないものがある。——第一に若年労働者の不足がある。近年出生率低下、進学率の向上は若年労働力の不足をもたらし、今後ますますひっ迫の情勢であり——第二に工業用水の問題。県内河川が少ない本県は、急増する工業水需要に対し給水体系をいかに整えるか。——これを適切に解決し工業化の推進を図る」

ここにはさきにみた独占の野望が露骨に語られており、さらに農業政策をみればこの関係はより明確になる。すなわち「基幹農家の経営規模は、農地流動化の促進により兼農農家、規模縮少農家の農地を優先取得し、平均二ヘクタールをこえるものとなる。」

また「農林業就業者は非農林業部門の労働力需要から、昭和六十年には現在の四〇万人から一八万人程度に減少が見込まれ、このうち一一万八〇〇〇人が他産業へ移動する。」

侵略体制と農民

日本の農業と農民、千葉県の農業と農民はこうして切り捨てられていこうとしている。

三里塚闘争は、こうした側面から見れば、独占資本の農村支配に対決しその先端を切り開く闘いなのである。

ドル防衛の強化によるアメリカ農産物輸入の激増、東南アジアへの帝国主義的進出のための農産物開発輸入で農業そのものの「合理化」が進行し、切り捨てられた農民は低賃金の補給源として、下から労働者の「合理化」を保障している。そのテコとなった農業基本法農政は、今や構造農政として新しい段階に入った。

現在一二〇万と称される出稼ぎ農民は、切り捨てられた農民の運命を象徴しているのだ。保安施設もない現場で、病気、けがにやられる出稼ぎ農民が年に約一〇%、賃金不払いに出くわすもの一〇%、ゆくえ不明一%、死亡〇・一%——千葉県内をとってみても六六年の発生労災死亡事故一〇二件のうち二〇%は四〇才以上の出稼ぎ農民である。

京葉工業地帯に進出した川崎製鉄でも最近は農村からの日雇い労働者を三〇〇〇人もつかっている。

われわれは、次章でこのような日本の農民問題即ち、アメリカ帝国主義への従属とアジアに対する帝国主義的侵略の渦中にある日本農民問題を、労農同盟の観点から位置付けてみたい。

カマと竹ヤリの闘魂
一五〇円
成田市駒井野　清宮力様方
三里塚闘争連絡会議
発行所　東京都千代田区神田司町二ー五
市村ビル
アジア・アフリカ人民連帯日本委員会
電話二九一ー一二一一